



Title	韓国都市の住居集合環境における屋外空間の構成と評価に関する研究
Author(s)	全, 現美
Citation	大阪大学, 2001, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/42368">https://hdl.handle.net/11094/42368</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	全 現 美
博士の専攻分野の名称	博士(工学)
学位記番号	第 16301 号
学位授与年月日	平成13年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 工学研究科環境工学専攻
学位論文名	韓国都市の住居集合環境における屋外空間の構成と評価に関する研究
論文審査委員	(主査) 教授 鳴海 邦碩  (副査) 教授 桑野 園子    助教授 小浦 久子    助教授 澤木 昌典

#### 論文内容の要旨

本研究は、韓国都市の住居集合環境における屋外空間について、生活環境のアメニティ向上の観点から、とりわけ緑環境に着目して、その実態と人々の関わり方や評価について明らかにすることにより、今後の韓国都市における住環境向上の方策について考察したもので、内容は本編6章および序章と終章からなる。

序章では、研究の目的と背景について述べ、さらに研究対象の概念規定を行った上で、関連する既往の研究について整理・考察している。

第1章では、中庭形態をとる韓国の伝統的な住居の屋外空間(マダン)および庭園の概念について、支配階層であった両班の住宅と伝統的庶民住宅を主な対象として考察を行い、さらにそれらの概念の変容傾向について論じている。

第2章では、韓国における典型的な都市住宅の形成とその屋外空間構成の特質について、伝統的な住宅の影響を受けた韓式住宅、欧米の影響を受けた洋式住宅、さらに集合住宅を対象に考察を行っている。

第3章では、1960年代後半までに開発された大邱市の韓式住宅地区を対象に、伝統的な形態をとるマダンの利用実態およびこれに対する居住者の意識と評価を分析することを通じて、マダンの現代的な位置付けについて考察している。

第4章では、1970年代の土地区画整理事業によって形成された大邱市の専用住居地区における洋式住宅を対象に、屋外空間の構成および利用の実態、さらには屋外空間に対する居住者の意識と評価の分析を通じて、伝統的なマダンの概念の存続と変容および新たな屋外空間意識の形成状況に関して考察している。

第5章では、1981年に建設された大邱市の大韓住宅公社住宅団地を対象に、共用屋外空間の構成と利用実態、さらにはその利用と管理に関する居住者の意識、およびマダンの機能を果たす空間の存在について調査分析することを通じて、集合住宅団地における屋外空間の特質について考察している。

第6章では、韓国の将来の集合住宅団地における屋外空間のあり方の検討に資することを目的に、日本における集合住宅団地を事例とし居住者の共用屋外空間の利用と意識について調査分析し、日韓の比較考察を行っている。

終章では、以上の分析、考察結果をとりまとめ、韓国の住居集合環境における外部空間の位置付けと、外部空間を利用した住環境整備のあり方について考察している。

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、韓国都市の住居集合環境における屋外空間に着目し、アメニティ豊かな住環境形成のための計画手法に関する基礎を得ることを目指し、伝統的な住居に付帯する屋外空間の概念およびその変容傾向について文献資料を用いて考察するとともに、韓国都市の典型的な形式の住宅によって構成される住宅地について大邱市の事例を対象として、さらに比較分析の観点から一部日本の事例を対象として、屋外空間の実態や居住者の屋外空間に関する認識およびこれに対する評価に関する調査結果の分析を通じて考察した知見をとりまとめたものである。得られた結果を要約すると以下の通りである。

- (1)韓国の伝統的な住居に付帯する屋外空間はマダンと呼ばれ、基本的に庭園とは区別される多用途の空地空間であり、このマダンの概念が、伝統的住宅である韓屋をモデルとして都市で普及した韓式住宅や近代的な様式の洋式住宅、さらには集合住宅にも、変容しつつ受け継がれてきていることを、文献研究によって明らかにしている。
- (2)韓式および折衷式住宅の居住者を対象とした意識調査の結果を用い、マダンと呼ばれる中庭空間の機能に対する重要度評価を分析することによって、居住者に5つの評価型グループがあることを明らかにし、これらのグループの空間認識あるいは利用意向の分析を通じて、従来様々な用途に利用されてきた空地空間であるマダンが、家庭菜園のような緑のある庭、さらには鑑賞を目的とした庭園的な空間に変化する傾向をもっていることを明らかにしている。
- (3)洋式戸建て住宅の居住者を対象とした意識調査を通じて、住宅に付帯する屋外空間に対して、空地空間であるという伝統的なマダンの概念もうかがえるが、むしろ植栽のためや多目的利用の空間として捉えられる傾向が強くなっていること、一方、庭は概念的に主に鑑賞するための多様に作り込んだ空間として認識される傾向にあることを明らかにし、さらに将来ともマダンおよび庭の両方の存在を望んでいることから、マダンと庭の実態的な区別が無くなりつつあること、マダンと庭の区別はその利用形態による可能性があることを示唆している。
- (4)上記と同じ調査の結果分析を通じて、戸建て住宅に付帯する屋外空間の鑑賞や趣味空間としての利用が増加するとともに、従来は敷際を高い塀とする傾向にあったものが、透過性の高い塀やフェンスを用いたまたその高さも低くすることへの意向が高まりつつあることを明らかにしている。
- (5)集合住宅団地を事例とした共用屋外空間の実態および居住者の意識調査を通じ、マダンの空間の役割が住戸内および共用屋外空間の双方に分節化して存在していることが認識されていることを明らかにするとともに、共用屋外空間に韓国の伝統を踏まえた休息施設が設置されるとともに食用植物や果実を採る植物等が住民によって豊富に植えられている実態を把握した上で、植物の重要性に関する居住者の意識が高く、その管理についても自主的に行うことを支持する居住者が過半を占めることを明らかにしている。
- (6)以上の知見をふまえて、住居集合環境における屋外空間の計画手法に関して、通りからの視線に配慮した戸建て住宅の庭や敷際のデザイン、韓国独特の空間文化や空間利用実態を考慮した団地屋外空間のデザインおよび居住者の参加を得た団地屋外空間の環境形成ならびに管理の必要性を論じるとともにその基本的方向について提言している。

以上のように、本論文は、韓国において自然環境への関心が高まっている現在、住居集合環境における屋外空間の自然、とりわけ緑に対する人々の関心や意向を踏まえ、居住環境・都市環境のアメニティを向上させる手法の提案を行っており、環境工学の発展に寄与する所大である。よって本論文は博士論文として価値あるものと認める。